

『MR I 開発と販売戦略の現在と未来』総括

昭和60年頃、当院にもMR I 装置導入の動きがあった。当時はNMRと呼ばれていた時代である。永久磁石のMR I 装置か、高磁場のMR I 装置か、スペクトロスコープ可能なMR I 装置か、業務の空いた時間に脳外科の先生方とカタログを隅々まで比較していたと記憶している。そして装置選定に伴い、脳外科の先生と技師がチームを組み施設見学に出かけていった。名古屋日帰り、鴨川日帰り、霞ヶ浦日帰りなど朝一番の列車に飛び乗り、強行日程を苦にもしないで意気揚々と出かけて行った。当時、実際に稼働しているのは、国産は1社、外国メーカー2社だったと記憶している。カタログやセミナー以外で生の画像を初めて見たこと、装置の大きさ、音、CPUの容量など、実際に見聞きし感嘆の一語だった。見学した施設それぞれで、実際にボランティアとして撮像を体験したことは貴重な経験であった。そして、その画像を施設の御好意にて持ち帰らせていただき機種選定の資料とした。結局外国メーカーの装置は高額であり、国産の装置を導入することとなった。導入されてからは、メーカースタッフと当院の専属スタッフがプロトコールに試行錯誤し、最良の画像を提供できるように努力したと記憶している。

それから20数年、装置の進歩はとどまることを知らない。CPU、コイル、小型軽量化など各メーカーが凌ぎを削り、装置の高性能化に努めている。そして、最善の診療画像を提供するために、放射線技師も凌ぎを削り装置の進歩に負けないようスキルアップに心がけている。今後は、3テスラのような高磁場の装置も日赤に導入されるのではないだろうか。しかし、高機能化に伴う高額化が経営を圧迫することもあるのではないだろうか。施設の規模や特性、診療体制や特殊性、採算性など、施設の経営基盤を考慮しその施設に見合った装置が導入されるものと思われる。

今回の特集は前回のCTに引き続き、MR I 装置の導入や更新の一助になれるような資料となるよう心がけた。そして、会誌を編纂するにあたり、5社に『MR I 開発と販売戦略の現在と未来』と題し寄稿をお願いした。各社においては快くお引き受けいただき、今回の特集記事とすることができた。会員の皆様には、特集記事をご一読いただき参考にしていただければ幸いである。また、技師会の学術部では6部門の分科会が立ち上がり、会員の為のホットラインとしての機能を確立しつつある。この特集も分科会活動への一助となれば幸いである。

今回ご協力を賜った企業は、株式会社日立メディコ、GE横河メディカルシステム株式会社、東芝メディカルシステムズ株式会社、シーメンス旭メディテック株式会社、株式会社フィリップスエレクトロニクスジャパンメディカルシステムズである。執筆を頂きました担当者の皆様に深謝いたします。尚、掲載順は、ご投稿いただきました順に掲載させていただくこととし、内容はご投稿いただきました原文のまま掲載させていただきます。

(文責：広報部 清水文孝)

- 1) 株式会社日立メディコ
- 2) GE横河メディカルシステム株式会社
- 3) 東芝メディカルシステムズ株式会社
- 4) シーメンス旭メディテック株式会社
- 5) 株式会社フィリップスエレクトロニクスジャパンメディカルシステムズ